

思考の生成

ホワイトヘッドの哲学における命題概念を中心として

佐藤陽祐(中央大学)

A.N.ホワイトヘッド(1861-1947)の哲学は難解であると言われる。とりわけ、彼の著書である『過程と実在』には、「現実的実質」(actual entity)、「永遠的客体」(eternal object)、「抱握」(prehension)など、他の哲学書ではお目にかからない多数の新奇な用語が散りばめられており、圧倒的な近寄りたさを感じさせる。そのうえ、具体例の少ないその記述を理解しようとするのは、格闘と言ってよいほどに骨が折れる。だが、それでもどうにかして彼の哲学のなかに分け入って、その要諦を一言で言いあらわせと求められるならば、次のように言えるかもしれない。「生きるということは、何かとかかわり合うことである」。

大上段にかまえて述べたわりには、この言明はさほど特別なことを言っているようには見えない。というのも、われわれは、物を食べたり、花の匂いをかいだり、人と会話をしたりする。あるいは、音楽を聴いたり、犬をなでたり、映画を見たりする。何かを好きになり、誰かに恋をし、何かを願い、何かを祈る。つまり、何かをするときには、われわれはつねに必ず何かとかかわっている。ことさら声高に叫ばなくとも、われわれはごく日常的に何かとかかわり合っている。したがって、何かとかかわり合うことは、生きることについての特別な特徴ではないように思えてしまう。しかしながら、何かとかかわり合っていないければ、われわれは生きていくことができないことも事実だ。物を食べなければ死んでしまうだろう。光がなければ見ることはできないだろう。重力がなければ地に足をつけて歩くこともできない。だから、われわれは、あらゆるものとかかわり合うことによって始めて生きることができるのである。こうして、生きるということは、何かとかかわり合うことなのである。

以上のように、ホワイトヘッドは何かとの関係性を重視する。彼の形而上学的体系が描きだす世界では、存在するものは、それ以外の他のあらゆるものと関係することによって存立している。どんなに些末なものであれ、何かが存在するためには、他の何かとの関係性がなければならぬ。それは、われわれが、光なしには見ることができないことと同様である。光との関係性がなければ、視覚は存在しえない。同じように、何かとの関係性がなければ、どんなものも存在することができない。だから、彼の体系において、独立自存する存在者というものはない。あるものが存在するためには他のなにかとの関係性が必ず必要になる。その結果、そのあいだに関係が見出される個別の項よりも、その関係性そのものが先行し、重要視されることになる。個別の項のあいだにいかなる関係が見出されるかではなく、もろもろの関係性からいかにして個別的なものが存在するようになるか、ということが問われるのである。

多数の蘊を集め、それらを強く束ねると、強度のある棒になる。同様に、もろもろの関係性を集めて、強く束ねると、存在になる。ホワイトヘッドはこのように考える。強く束ねるところか、さまざまな関係性を凝縮すると言ってもいいかもしれない。もろもろの関係性は、凝縮されて一つの塊とな

る。この塊が関係性からできた存在である。ただ、できあがったこの塊そのものには彼はさほど注目しない。つねに注目されるのは、生み出されたこの塊が、それ以外のものと持ちうる新たな関係性のほうだ。そこで、この新たに見出されたさまざまな関係性を再び集め、強く束ねる。するとまた塊ができる…。ホワイトヘッドによれば、こうした運動の繰り返しがこの世界のあり方だということになる。ここで、誰が関係性を束ねるのかとか、どうやって関係性を束ねるのかなどの疑問が浮かぶかもしれない。しかし、それらの疑問についてはひとまずおいておこう。ホワイトヘッドは、もろもろの関係性を集め、それらを束ね、強度のある塊(存在)を作りだすまでの一連の運動を「プロセス」(process)と呼ぶ。この運動は、先にできた存在との関係性から「生成」(becoming)する。多様な関係性を束ねるプロセスの生成によって、一つの「実在」(reality)が生まれる。『過程と実在』というタイトルが表現しているのはこのことだ。

論者は、以上のようなホワイトヘッドの形而上学的体系のなかで、知覚経験や意識的経験がどのように生じるのかについてこれまで吟味してきた。本発表は、これまでの考察を踏まえ、プロセスにおいて人間の思考というものがいかにして生じるのかという問題を扱う。知覚経験や意識経験については、プロセスのなかに登場する「命題」という概念にもとづいて整合的な説明を試みた。というのも、意識や知覚といった高次の経験には、「命題」が必ず関与しているからだ。今回も同様の方針を取り、ホワイトヘッドの「命題」概念を用いて思考の生成の機序を明らかにすることを試みたい。この試みにおいてまず課題となるのは、思考と知覚の差異を明らかにすることだ。われわれはさまざまな経験をしている。痛みなどの感覚経験、喜怒哀楽といったさまざまな感情の経験、昨日食べた夕食についてなどの記憶の想起という経験、空想上の生き物や図形等のイメージ経験、自分が自分の意識していることを知る自己知の経験などがある。こうしたさまざまな経験において、どれが知覚経験でどれが思考経験なのかをわれわれは知っている。しかし、その違いを生んでいるものは何なのか。この点を明らかにしなければ、プロセスにおける思考の生成を扱えない。つづいて、思考と知覚の違いを明らかにしたうえで、思考と知覚の関係を吟味する。すなわち、思考が知覚にもとづくものであるということを主張する。このことは、ホワイトヘッドの言うプロセスの生成における「高次の経験の諸相」を詳細に検討することで明らかになるだろう。こうした手続きを踏まえ、プロセスにおいてわれわれの思考という経験がいかにして生じるのかを最終的に明らかにする。